

## 第1回 安威川ダム周辺整備検討委員会の議事要旨

日 時 : 平成19年7月30日(月) 10:00 ~ 12:00

場 所 : 大阪府中央区大手前三丁目1番43号 プリムローズ大阪 2階 鳳凰西の間

出席者 : 理学博士 : 井田 和子  
阪南大学国際コミュニケーション学部 教授 : 貴多野 乃武次  
茨木市観光協会 理事 : 小阪 登志雄  
近畿大学理工学部 教授 : 久 隆浩  
大阪府立大学大学院生命環境科学研究科 教授 : 増田 昇  
社団法人淡水生物研究所 専務理事 : 森下 雅子

事務局 :  
大阪府都市整備部河川室ダム砂防課  
大阪府安威川ダム建設事務所  
茨木市建設部

### 議 事

委員会設立趣旨、設置要綱(案)、検討スケジュールと審議事項(案)の説明(事務局)

設置要綱(案)の承認

委員長の互選(委員)

委員長 : 大阪府立大学大学院 教授 増田昇

委員長代理の指名(増田委員長)

委員長代理 : 近畿大学 教授 久隆浩

議 題

趣旨及び現状説明(説明)

安威川ダム周辺のあり方について(説明及び審議)

## < 審議まとめ >

- ・安威川ダム周辺のあり方については、「自然環境」と「人の営み」の調和を目指す。
- ・エリア構成としては妥当である。

### 主な意見

- ・安威川ダム周辺の多様な資源と、どのように連携していくか、という観点が重要。
- ・ダムにどのようにプラスアルファを付けていくか、エリアに利用行動を想定しながら検討。
- ・どのくらい人を集めるのか、数値目標を設定すべき。
- ・楽しさを享受できれば、たくさんの方が来なくても、そこを訪れる人にとっては質の高いものである。いろんな施設を作るよりは、周辺の方がホッとできる環境が合っているのでは。
- ・周辺の人々が気楽にリピーターとして何回も来られるところではないか。
- ・ダム湖というよりも、周辺と一体化して半日くらい滞在して頂くようなことも良い。
- ・安威川ダムの観光については、「脱日常」よりも「日常」的なところに、自然の中で学びながら遊ぶ、という要素がよい。
- ・棚田を守るために、どういうプログラムを組んでいくか、というのもポイント。
- ・地域では、棚田が遊休農地にならないよう、花を植えたり、貸し農園など作戦を練っている。下音羽川の渓流についても、竜王山の岩屋と連携して、ハイキングコースとして整備を進めている。自然を壊さないで、人が来てくれる方向で努めてもらいたいと思っている。
- ・人が入ることにより自然環境が良くなるような仕組みを作っていくことが求められる。

### 第2回委員会に向けて

- ・立ち寄り経路とすれば、どれくらい年間交通量があるのか。
- ・ダム湖周辺から5キロ、10キロ、あるいは徒歩圏1キロで、現在及び将来の人口を整理されたい。
- ・歴史・観光的なネットワーク、自然遊歩道型ネットワーク、複合型など、どのような位置付けになるのか。
- ・同じような自然学習や体験学習のプログラムとして、競合するようなプログラムが周りにあるのか、というようなことも調査されたい。
- ・安威川ダムと隣接地域とのつながりの中で、観光ネットワーク的なポテンシャルとしての評価をされたい。
- ・安威川ダムを中心とした観光ネットワークのような、連携できるルートや可能性を検討されたい。
- ・人の寄りつきのポテンシャル解析をされたい。
- ・ダム湖と隣接地域とのつながりの中では、場所を区切ってしまうと場所ごとの対応という形になるので、エリアのつながりのうまい表現の仕方を検討されたい。

< 審議詳細 >

( 委 員 )

- ・ここは非常に多様な資源がある地域であるので、どのように連携していくか、という観点が重要、利用行動なども重ね合わせながらエリア別に持っていった方がいい。
- ・ダム以外の周辺との連携が、どううまくいくかというところが、ポイント
- ・プラスアルファをどういう形で周辺とつけていくのか検討が必要。

( 委 員 )

- ・目標というのは、目的を数値化したものであり、多くの場合、数値が主になってくる。
- ・自然環境保全のみならず、周辺整備に伴って人を呼び寄せようということを前提として考えるならば、どのくらい人を集めるのか、という数値目標というのを設定すべき。
- ・また、数だけの数値目標だけではなく、サービス品質の数値目標も設定しないとイケないのではないかと思う。

( 委 員 )

- ・行政的に考えてしまうと目標や数値を必ず達成しなければならないということが、あまりにも重荷になって、数値目標化ができなかったのではないか。
- ・今回は、目標数値を、達成しなければならないという形ではなく、それを追いかけるような形でのメルクマール(目標)として設定してみるということを考えてみると、少し気が楽になる。

( 委 員 )

- ・大きな目標数値というのは、集客、観光、レクリエーション活動を含めて周辺整備に伴う大まかな設定をしておかないといけない。
- ・レジャー施設においてもこれからはどんどん成長させる時代ではないと思う。さらに言えば成長を管理する時代、持続性(サステナブル)を管理する時代であり、それが大きな方針になる。方針になればそれを目標値として掲げるほうがよい。
- ・ここに年間どれくらいの人が訪れることがよいことなのか、そういうのは基本構想レベルであっても設定したほうが良いのでは。

( 委 員 )

- ・オーダーが大事。10万人規模なのか、50万人規模なのか、100万人規模なのか。オーダーがきまると、おそらく想定する圏域が見えてくる。
- ・関西を中心に考えるのか、全国を中心に考えるのか、あるいは府域とするのか、すると競合する施設、あるいはこういう特色作りをしていけばいいということがわかってこようかと思うので、少しオーダー的な目安を立てるのも必要。
- ・仮に100万人と想定した時に、管理のためのリピーターや、ボランティア組織などの、管理に寄与するような形のオーダーがどれくらいで、お客としてのオーダーがどれくらいなのか、少し振り分けるとサービスの質というところでアクセスできるかも知れない。

( 委 員 )

- ・施設を利用している人はあまりダムを見ていない。ダムに直接入っている人は、逆に何回も来られるようである。楽しさを享受できれば、たくさんの方が来なくても、そこに訪れる人にとっては、質の高いものなのではないか。
- ・安威川ダムの場合は、周辺の住民の方が時々遊びに来るような規模なのではないかと思う。全国から人を集めるとか、いろいろな施設を作って数値目標をたてるということよりは、周辺の方がホッとする環境が合っているのではないか。

( 委 員 )

- ・周辺の人々が気楽にリピーターとして何回も来られるところではないかと思う。
- ・狭山池ダムでは、ゴミ拾いをする人、車椅子の人を連れた癒しの享受、バードウォッチングをしている人、結構たくさんの方が歩いている。桜のシーズンになれば更に多くの方が来られる。このように、交通機関を使っても30分以内で来られる人たちがいくらでも来て楽しめる、そういうところになるのではないかと思う。

- ・大泉緑地でもそうだったが、利用者は朝のランニングや休日にストレスを癒す家族づれなど、普通に都会にある公園と同じような楽しみ方が中心であり、安威川ダム計画にも範を垂れてくれているような気がする。
- ・他ダムに比べ、交通や多様なものがアクセスしておりまた周辺人口も多い。温泉等、お金を使うような集客施設をつくるのではなく、30分以内で何度も行ける、自分の庭になるようなところになるのではないか。

(委員)

- ・地域住民がどれくらい利用しているのか、地域住民の利用率も十分目標値になる。商業施設と同じで多くの集客施設はそんなに遠くからは来ない。第一次顧客はどこにいるかという、やはり30分圏内が妥当になるだろう。
- ・そう考えれば、そこで行われる活動、提供するサービスが、おのずから決まってくるし、重要なことである。

(委員)

- ・リピーターを確保することと、新しい客をとるのとでは当然、施設の整備やプログラムが違ってくる。

(委員)

- ・人が大勢入ると自然が壊れることが懸念される。生態系の消滅等をできるだけ抑えようと、森林エリアの有効活用はできないか。
- ・人が来てくれないことには観光にならないが、人に来て頂いて、自然も荒れない。これが、私たちが考えることである。

(委員)

- ・ここでいう人が入るといのは、負荷をかける利用の仕方と、反対に育成・保全・管理をするための人の入り方、両方の人の入り方があると思う。
- ・多くの場合、保育管理をしてもらって、それが楽しみであるとか、健康づくりなどと共用できれば、人が入ることが反対に保全、育成につながる割合も、想定できる。
- ・単にダメージを与える入り方だけではなくて。そのような視点が大事になってくる。
- ・茨木市の実行計画では環境拠点づくり、拠点づくり、拠点形成ということが書かれているが、周辺地域全体を含めた地域づくりみたいなのが目標になりうるのか。

(委員)

- ・拠点といっても温泉地等ではない拠点という意味合いで捉えて欲しいと思う。
- ・環境をいかにうまく活用して楽しんで頂くためには、どうプラスアルファすればいいのか。そういう構想、考え方がいい。
- ・このダム湖の一番大きな特長としては、周辺に何万人が居住する市街地があるところが、他のダムに比べてメリットであり、この周辺の市街地の方々に、どうアクセスして頂いて利用して頂くのか、そのためには、どういう施設整備を行えばうまくいくのか、という観点が重要になる。
- ・ここは歩いて行ける範囲にかなりの人が住んでいる、そこをターゲットにするべき、あとは通りすがりの方々にちょっと利用して頂くような施設があればと思う。また、ダム湖というよりも周辺と一体化して、半日くらい滞在して頂くようなこともあってもよい。
- ・そうであればここにすでにある環境をつぶしてしまうような整備は逆効果なのではないかと思う。

(委員)

- ・立ち寄り経路とすれば、どれくらい年間交通量があるのか。
- ・ダム湖周辺から5キロ、10キロ、あるいは1キロピッチで将来どれくらい、また現在の程度の人口が張り付いているのかデータとして整理されたい。
- ・立ち寄り経路とか拠点といったことを考えるとどのような経路が設定できるかも検討していく必要がある。
- ・歴史・観光的なネットワーク、自然遊歩道型ネットワーク、複合型など、どのような位

置づけになるのか設定してみてもは。

- ・同じような自然学習や体験学習をプログラムとして、どんな競合するようなプログラムが周りにあるのかというようなことも調査されたい。

(委員)

- ・アクセスの整備をうまくやると、もっと活用できるのではないか。
- ・ルート設定プラスここへのアクセス、この地域へのアクセス性を向上すると、地域の魅力も享受できるのではないか。

(委員)

- ・そのあたりも今の状況を調査して頂きたいと思う。路線はきちんとあるとしても、時間・間隔が問題で、1日に本数がないとなると問題になるかと思う。

(委員)

- ・経験経済の時代と言われており、いま4つのEのつく言葉に着目して様々なアトラクションなり、プログラムなりが考えられている。
- ・まずは「エデュケーション」と「エンターテイメント」、これらが組み合わさった「エデュテイメント」は自然のなかでの学びながら遊ぶということにつながる。
- ・次に「エスティック(自然のなかでの美を見つける)」、「エスカピスト(脱日常)」といった要素があり、このうち、エスカピストは観光の要素につながるが、安威川ダムについてはエスカピストではなく、日常的なところにこれらのEをつけていくことが良いのではないか。
- ・もう一つの時代は「テドロジー(TEDOLOGY:TED)」の時代、これはテクノロジー、エンターテイメント、デザイン、私の場合もう一つのE(エコロジー)をつけ、Eを二乗とした「TE2D」とするのだが。
- ・ここで忘れていけないのは、携帯電話というテクノロジーを使えば、わざわざ大規模な整備をしなくても、いろいろな情報をそこへ流して楽しめる、あるいは教育させる、そういうものができるはず。
- ・特にテクノロジーについては、日進月歩も含めもう少し長い目で考える必要がある。

(委員)

- ・地域づくりということで、この中には集落があるが、集落の中の生活、地域活性化と周辺整備の関係などはどう考えたらいいか。

(事務局)

- ・地域との連携としては、ハード面として道路整備等を地域と一体となり進めている。
- ・ソフト面としては、自然というものも放っておけばよいものではなく、人との関りがあって初めて保全されるものであり、その辺りも含めて地域の方とどのように取り組むべきか意見交換を進めている。
- ・ワークショップにより棚田の保全、森林のボランティア等、現在の自然を如何に保全していくかを議論している。
- ・市の第四次の総合計画、都市マスタープラン等においても自然とどのように関わり保全し利用していくか、ということが大事だと考えている。

(委員)

- ・市街地に近いことは利点であると同時に、逆に難しい面がある。
- ・安威川ダム周辺は、茨木市街地でいろんな業種に携わっている方が大半であり、棚田を守るというようなことを難しくしているのではないか。
- ・その辺を加味して棚田を保全するという形に持っていけないと、集落や棚田の景観は守られてこないし、棚田だからこそ維持管理が大変なこともある。
- ・その点について、どういうプログラムを組んでいくのかというのも、ポイントの一つ。

(委員)

- ・環境資源もいろんな課題を持っている。どういう可能性と限界性を持っているか。
- ・棚田は資源になりうるが、何らかのプログラムを与えないと、今の居住者だけでは限界

性を持っているということが見えてくると、プログラムや整備の方針が明らかになってくるのではないか。

(委員)

- ・ 棚田については、従事者の高齢化、それに加えて市街地への通勤が可能で人材が出て行く、また若者など後継者の不足などから遊休農地になっている。
- ・ 農地は2～3年程度の放置なら元にも戻せるが、10年も放っておけば再耕作も不可能となる。それを阻止するために、地域の実行組合への呼びかけにより開墾し、花を植えたり、貸し農園などの維持作戦を練っている。
- ・ 溪流についても、下音羽川の中に、大きな岩が散乱していてきれいなところがある。それについても、竜王山にある岩屋と連携をして、ハイキングコースとして整備を進めている。

(委員)

- ・ 資料2の2ページの周辺整備のあり方の中で、人の営みと自然とのバランスをどのようにとっていくのか、ダム湖周辺としても場所によってはポジショニングも少し変わる可能性があるということについてはよろしいか。
- ・ 安威川ダムと隣接地域とのつながりのなかでは、観光ネットワーク的なポテンシャルとしての評価をされたい。
- ・ 安威川ダムを中心とした北摂地域での1日、あるいは日帰りの観光ネットワークのようなもの、連携できるルートや可能性を、次回までにスタディー(検討)されたい。
- ・ 人の寄りつきのためのポテンシャル解析をされたい。
- ・ 資料2の6ページのダム湖と隣接地域とのつながりの中では、場所を区切ってしまうと場所ごとの対応という形になるので、エリアのつながりのうまい表現の仕方を検討されたい。

(委員)

- ・ エリア構成としては妥当なものであるが、利用イメージとしてのネットワーキングということの方がわかりやすく書きやすいと思う。

(委員)

- ・ そのあたりの検討もされたい。
- ・ 次回は、理念の議論あるいはゾーニングやエリアイメージの議論だが、どういう人がここを利用するのか、というオーダーと同時に、利用者層を想定するという話も理念の中で、オーダー的な数値を与えながら提示されたい。

(委員)

- ・ 従来型とは違う集客、観光、特に人が入ることによって自然環境が良くなるというようなものを重点的に調べてご提示されたい。

(委員)

- ・ 環境と自然が資源、とはいうものの、単純に言葉としてしか表現しておらず、その辺の評価を入れてみて可能性と限界性みたいな話も必要かもしれない。
- ・ 提言につなげていく時には、可能性と限界性というものを整理することによって、単に「人と自然の営み」など、大きなことをいってもぼやけているだけなので、もう少し明確な独自性を出していけるのではないかと思う。
- ・ 安威川ダム周辺のあり方について、の議論が進んだ、これをベースにしなから少し修正して、次回保全、整備の方針へつなげられたい。

以上